

責任編集者・平川克美

『望星』における詩の特集は、今回で二度目です。一度目のタイトルは「詩のある生活」でした。二〇一八年のことです。その前年、アメリカ合衆国の大統領に就任したドナルド・トランプは「偉大なアメリカを取り戻す」というわかりやすく、シンブルなフレーズを繰り返して、アメリカの実利を優先させる保護主義的な政策を打ち出し、失業や貧困にあえぐプアホワイトから喝采を浴びました。その過程で移民排斥や社会的マインオリティに対する差別的な発言が繰り返され、自分に都合の悪いニュースや敵対的な言論に対してはフェイクニュースであると非難しました。

トランプにいち早く呼応した我が国の総理大臣もまた、「日本を取り戻す」「美しい国づくり」を標榜して、ナショナリズムを煽りました。身内優遇の政治が批判

された森友学園に対する利益供与疑惑の中で、財務省の決裁文書の改ざんが明らかになりました。

当時、美術誌に求められて書いた文章の中で、私はこんなことを書いています。「私たちは、ポスト・トウルースの時代（真実が力を失った時代）に生きている。その意味は、真実が語られなくなったのではなく、真実を見ようとする意志が、嘘を嘘と知りつつ騙されることの快楽にとってかわられた世界だということである」。

前回の特集、「詩のある生活」は、そうした時代状況の中で、真実と直面する苦さを噛みしめることで、言葉の力を取り戻す試みだったと思います。

あれから三年が経過しました。コロナ感染症の蔓延という災厄が加わり、人と人が隔てられ、状況はさらに昏迷の度を深めています。今回の特集に際して、私は次のような依頼書を詩人たちに向けて送信しました。

二つの大戦の間戦期に、T・S・エリオットは、破壊された街の路上で世界の死を見つめ、その再生を願って難解な長詩「荒地」を書きました。同じ年に、J・ジョイスはこれまで誰も書いたことのない

ような小説「ユリシイズ」を発表しました。変化は、文学に留まらず、絵画、建築、演劇などあらゆる表現形態にモダニズムの潮流が生まれました。その突破口は言葉であったと私は考えています。

さて、ジョンズ・ホプキンス大学の集計によると、このコロナパンデミックによって、アメリカ人の死者数が、第二次大戦の米軍人の死者数を超えたという。エリオットの時代を彷彿とさせる現代の「荒地」に私たちは立っています。

現代の「荒地」は、パンデミックや経済格差、環境破壊として現れるだけではありません。大言壮語や厚化粧で粉飾された言葉の瀾漫もまた、この現代の「荒地」を象徴しているように見えます。「骨太の方針」「人類がコロナに打ち勝った証」「日本を取り戻す」「安全、安心な大会を実現することにより、希望と勇気を世界中に届ける」「五輪で絆を取り戻す」、数えあげればキリがないほどの広告代理店的な煽りと嘘の生えたようなストックフレーズの氾濫にうんざりするとともに、これこそ時代の危機なのではないかと思うのは私だけではないと思います。

(中略)

現代の「荒地」は何よりも言葉の溶解によってもたらされた。私はそのように感じています。詩は、破壊された言葉や、詩の形式を利用した「反詩」の氾濫のなかで、逼塞しているように見えます。時代に迎合し、あるいは利用され、あるいは消費され、やがて人々の無関心の中で忘れ去られる言葉に終止符を打つ必要があります。

詩人の使命とは、腐った言葉で装飾された現代の荒地の加担者であることを敢然と拒否し、詩のない生活の中に、干天の慈雨のような言葉を降らせることだと思えます。

この度の作品は、このやや過剰で大時代的でもある呼びかけに、真摯に応えてくれた詩人たちの言葉の結晶です。時代によって飼い慣らされた言葉を、野に放つ。それこそ私が密かに期待していたことです。一般読者向けの本誌ではやや異質ともいえる特集を、読者諸氏にどのようなお気持ちで受け止めていただけるかは不明ですが、これらの作品たちが忖度とお為ごかしで粉飾された時代の言葉に打ち込まれたクサビとなり、読者にとっての希望となって欲しいと願っています。